



Title	8章 文学に見る時間意識 近世における『古文真宝』の影響と『おくのほそ道』
Author(s)	若木, 太一
Citation	転換期の社会へ向かって 人間的時間の復権と社会創造 (長崎大学公開講座叢書 4), pp.97-109; 1992
Issue Date	1992-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/33491">http://hdl.handle.net/10069/33491</a>
Right	

This document is downloaded at: 2019-10-20T21:46:09Z

## 8章 文学に見る時間意識

—近世における『古文真宝』の影響と『おくのほそ道』—

若木 太一

(教養部文学教授)

### 1節 離別の悲哀——時間と空間——

古代人はどのような時に「時間」を意識しただろうか。

その最初の体験は、愛するもの——父母・兄弟・夫婦・友人・恋人——など、馴れ親しんだものたちとの別れの時ではなかったろうか。いつも側にいて、食べ、語り、働き、寝起きを共にしたものたちが姿を消した時、ただその人の不在ゆえに、われわれは空虚や孤独、悲哀や絶望を感じる。愛別離苦には耐えたとしても、死別のような絶対の喪失には多くのものが悲しみの涙を流してきたのである。人が生れ、生きる限り、逃れようもないものとして、人々の生活の中に離別の悲哀は意識されてきた。

このような別れの悲しみは、古代人もわれわれ現代人も同じく日常生活の中であって、「あの時は」「その時は」と、あの「懐旧の情」といわれる思いを添えながら、時間の経過の意識下で体験されるものである。

その古い例がよく知られる「古詩」にみられる。いま榊原篁洲注の『古文真宝前集<sup>注①</sup>諺解大成』(天和3年〔1683〕編著)を読み下して引用する。

行行重テ行行

君ト生ナカラ別離ス

相去ルコト萬餘里、各々天ノ一涯ニ在リ

道路<sup>〰</sup>阻テ、且夕長シ

会面安ソ期ス可キ

胡馬北風ニ依、越鳥南枝ニ巢

相ヒ去ルコト日已ニ遠シ

衣帶日已ニ緩シ  
浮雲白日ヲ蔽ス  
遊子返ルコトヲ復ズ  
君ヲ思テ人ヲシテ老シム  
歲月忽ニ已ニ晩ヌ  
弃テ捐テ復タ道フコト勿カレ  
努力餐飯加エヨ

『楚辞』第29歌の辞である。よく知られた詩であるが、ここでは箕洲の注に従って、近世人の読解を伺ってみたい。

「行々——」の「言は国を去て出行し興君生ながら別れ離ると也」と、この主題をここで提示する。そして「人の歡樂は始て新に相知て交るより樂はなし、世に悲きは死死去にもあらで生ながら別離するより悲はなきと云へり、此詩に生離別の字を取用たると也」という。ここでは死別以上に「生別離」の悲しみとつらさを指摘する。

「相去——」は「今より行き行きては君と相去の間万里の餘も遠して長天遙に隔り此の天末と彼の天末と各一方に索居すると也」と空間の隔たりをいう。「道路——」は万里の道を離れ、山川路程を越えねばならず、「後会の対顔」はいつできるか定めがたいという。「古馬——」の二句は、「故国を不忘の意」をこめたものとする。「胡国の馬中国に来て後北風の吹に遇へば必故国の思ひを感じて風に向て嘶也、越鳥は南方より来る鳥なれば舊を不忘して常に南を指す枝に巢ふて棲む也、是皆其舊国を思ふ也」と、人が生れ故郷を懐く気持を表現したものという。そして「相去——」は、「舊国」が日々に遠くなり、「道路の勞」が重なって疲れ、「形体衰へ」て衣帯が日に従って緩む旅路の辛酸をいう。

「浮雲——」の両句は、素直にことばを解すれば、浮雲が太陽を覆い隠し、旅人である君は故郷に帰ろうとはしない、という意味である。しかし箕洲は近世人らしく、「讒佞の臣」が「浮雲の白日を蔽ふが如く君の明を蔽ひくらまして」「忠臣志を失て長く外に去て顧み返ること無」しと解釈する。

「令人——」の「人」は「即我也」とする。つまり「君を恋ひ思ふに因て我

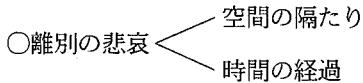
が形を老衰せしめ空しく日を度りて歲月已に晩景に逼ると也、是歲月已に晩て君に忠を致すの日幾くもなきことを嗟也」と前句を承ての解である。結びの「弃捐——」の二句は、「思深く情切にして憂懐いかんともしがたき中より此辞を言て自ら胸中を寛うするの意」である。つまり「君を思ふことの深き形を老するに至るそれ此くの如く、思ふと云へども終に益なし。我身又真に惜むべし、因に自我が身に勤めて云ふ只棄捐て心に忘れ復た道ふことなかるべし、努力して餐飯を加へ倍して自ら身を保重すべき」と。

この詩の言うところは死別以上に重い「生別離」の悲哀である。篁洲の注解もそこを強調している。

まず「相去ること万餘里」の空間の隔たり。次に「胡馬」「越鳥」に寓意された「舊国」、すなわち故郷への懐旧の情。そして何よりも別離が「我が形を老衰せしめ」「歲月已に晩景に逼る」時間の経過の上にあることの指摘である。篁洲はこの部分を主君に忠義の奉公ができない事を嘆く気持と解釈するが、それはそれとして、ここで重要なことは過ぎ去って決して戻らない時の推移に対しての悲しみを述べている点である。ここでは「老衰」という肉体的変化、「晩景」という自然の推移に時間の経過を見てとっている。

すでに古代人は、別離の悲しみの中に「時間」を感じ、「時間」＝変化の相と認識していたというべきであろう。そして近世の篁洲ならず、現在のわれわれにおいてもその通り受けとめられるところである。

これを簡略に図式的に示せば次のようにいえようか。



「離別の悲哀」は人と人が空間の隔たりと時間の経過を介して生ぜしむる情感である。「別離」とは人と人との関係の変化である。その変化を生じさせるのは「時間」と「空間」という機会・契機や世界・場面の交においてである。

吉川幸次郎氏はこのような古詩の世界に「人間が時間の上に生きることを意識することによって生まれる悲哀の情」を見てとり、これを「推移の悲哀」と論じている。また戸倉英美氏は「古詩の時間と空間」において、「人間はとどまることない時間の中に生きている。この自覚は『楚辞』に始まる。そして

以来悲しみとは、この如何ともし難い時間を悲しむことになったのである」と述べている。

さらに離別の悲哀を正面からとりあげた作品として知られているのは杜子美の「夢李白」であろう。前掲に同じく篁洲の『古文真宝前集諺解大成』による。

死別ハ已ニ声ヲ呑ム  
生別ハ常ニ惻々  
江南瘴癘ノ地  
逐客消息無シ  
故人我が夢ニ入ル  
我カ長ク相憶フコトヲ明ス  
恐ハ平生ノ魂ニ非ンコトヲ  
路遠フシテ測ル可カラズ（後略）

篁洲の解釈はこうである。「世に死別ほど可悲ものはなし、然れども死別は當時声を呑で慟哭すれども已に哭して後歲月うつり隔ればいつとなく哀うすくなりて忘るべし、是は既に死去テ永く訣れ又再会を思ふの心なき故也、唯生て別離する者は心に忘るゝことなく遙に相思て情最切なるは互に世に在ながら索居するを悲しみ再相見んことを思へば也」とここでも「生別離」の悲哀の重さを指摘している。玄宗の子肅宗の世に、その弟永王璘が謀叛をおこした。李白は永王璘に仕えており謀叛に與した党類として江南の潯陽に流された。杜甫は流滴された友李白を夢に見たが、その生死すら定かならず、「故人」の語を用いたものらしい。「夢中杜子美心におもへらく恐くは李白平生の魂にてはあるまじきかと疑はしき也、いかになれば来る所の路の程遠きこと測りがたし、夢魂よもこゝまでは来り得ましければ也」というのである。本詩にはまた「浮雲終日ニ行ク、遊子久ク至ラズ……」と始まる二篇があり、三夜続けて李白を夢に見たことを述べ、その離別の哀惜の深さをうったえている。ここでも注意したいのは夢の中ですら「路の程遠き」ゆえに疑わしく思うという果てしない距離感である。「故人——」の二句の箇所を「李白吾が夢に入て見へ来るは是我

が常に相憶ふ情の厚きに感ずるの心を明さん為に神魂格来ると也」と注解する。時間と空間をへだてた離別の悲哀のゆきつく姿であろう。あの芭蕉も『嵯峨日記』（元禄4年4月28日）に杜国のことを夢に見て涕泣して目を覚ましたことを書き付けている。この時すでに杜国は死没しているが、その心情は似通っている。

## 2節 開花と零落——変化の相の観察者——

『楚辞』には自然の変化を嘆じる詩も少なくない。嘆ずるというより、時間の推移を受け容れ、ただ見まもるしかないのである。

日月は忽として其れ淹らず  
 春と秋とは其れ代序す  
 草木の零落を惟い  
 美人の遅暮を恐る

（「離騷」）

日月の運行、春夏秋冬の四季の巡り、草木の開花や零落など、人は風景の変化を見ながら生活してきた。種蒔き時や収穫の季節、狩猟・漁獵のチャンスを知るなど、生活の中でも「時間」は意識された。夜明けに起きて働き、日が暮れて帰り、眠った。人は日常生活のリズムを作ってきた。祭事、儀式、行事などの歳事のもろもろが私的にも公的にもパターン化し、習慣化し制度化されて、安定した生活の様式をもつことになる。やがて暦や時計が考案され、人々は「時間」にそって計画的な生活を営むことになった。

人はまた、四季の巡り、自然のリターンに対し、老いて再び戻ることのない生命の一回性をも知る。「時間」は決して後戻りをしないその不可逆性を認識する。その中で文人や詩人は、季節の移り、変化の相を愛おしむ余裕をもつ。

『古文真宝前集』の陶淵明の「四時」はその代表格であろう。

春水四澤ニ満チ  
 夏雲奇峯多シ  
 秋月明輝ヲ揚ゲ

## 冬嶺孤松秀ツ

篁洲の言うところをかりれば「春夏秋冬四時の間にすぐれて奇なる景物を詠して四句を以て一年の奇景をのべ尽す」というもの。「水色の緑も深」い春の一景。陽気盛んな山谷に湧き出る数々の「彩雲」のかたちは夏の一景。「澄徹」「晴明」なる秋の月。「千草万木皆霜枯て色かはり葉落ちて山の景気さびしき時」に「寒を凌て秀て出つ」孤松の姿。このように「世間繁華の景を愛せずして此自然の景を娯て四時の奇景とす、淵明が心も亦想ひ見つべし」と篁洲は感想を記している。

季節の移ろいを愛し、いとおしむ懐いは『万葉集』以来わが国の歌の世界での主要なテーマであった。吉川氏の指摘する「推移の悲哀」は万国共通の普遍的なもので、人事と結びつけ、自然と人間の関係を相対化して嗟嘆したり観想したりするものが多い。勅撰集の部立は単なる分類というものではなく、季節や時間を意識的に配列したものである。これは連歌や俳諧においても同様である。とりわけ連・俳における季語は、四時の移りを象徴する言葉を美の結晶として磨きあげてきたものといえよう。これは、変化の相すなわち「時間」を美的に結晶させた言葉といいかえることができる。

次に掲げるのは各務支考の仮名詩「四季ノ花鳥」と題する作品。

君見よや春と秋と

花咲けば葉おつとよ

葉はおちばはくべきに

花になやむ我がこころ

注④  
（『本朝文鑑』）

絶句に倣ったようなこの仮名詩は、形式的も前掲した陶淵明の「四時」に似かよっている。開花や落葉に一喜一憂する日本人の古来からの美意識がいかにも観念的であるが、「四時」に比較すればいっそうやさしく、かぼそく優美にすら感じられる。この支考以上に芭蕉をはじめとする蕉門俳人らは、さらに繊細に季節を観察している。いちいちの例は引くまでもなく、近世の俳諧のほとんどは季節や季感を詠じている。戸倉英美氏は漢代の詩を「詩間の詩」と

指摘したが、同じく俳諧も「時間の詩」だと言ってよいだろう。

このような詩人や文人たちは、季節の推移や変化の相を人事とともに詠嘆してきたが、観察し思索的に観想したものもあった。

『枕草子』（260段）には「ただ過ぎに過ぐるもの、帆かけたる舟。人の齡。春、夏、秋、冬」と記す。『方丈記』では河の流れの泡を見て、露、人、家、命、夢の移ろい、変化する世界を観想している。また、「折節の移りかはるこそ、ものごとに哀なれ」と『徒然草』の観想は、「あだし野の露」「鳥部山の烟」に象徴する人の命、「飛鳥川の淵瀬」に見る「時移り、事さり、樂しび、悲しびゆきか」う自然と人事との永遠の無常を透徹した世界観を提示している。ともに中世の時間論として注目に値する作品である。『方丈記』から『徒然草』への無常観の推移を、詠嘆的なものから自覚的なものへと展開・深化したとする見方もあるように<sup>注⑥</sup>、その本質も歴史的と個別的とにおいて、一つのものとしては論じられない。

ここでは、中世の時間論としてこれらを考慮すべきであることは指摘するにとどめておく。当時の、常無き世と思う世俗の末法観は多くの部分で無常観と重層するものであり、仏教の説く輪廻・転生の教えにすがりたい気持を生じさせた。そのような中で、人は限りある生の貴重さを知り、ややもすれば刹那的に生き、末法的な時代の雰囲気自ら作り出してしまったのではなかったか。人は古代の制度や文化を破壊する一方、新しい美の創造と様式化を進めた。中世の暗さや異様な輝きは、このような「時間」の意識が生みだした現象と見てよいのではなからうか。

また、無常観を支える仏教的思索は、輪廻・転生という宇宙論的生命観を提供し、前世・現世・来世という円環的時間論を生み出していたことを忘れてはなるまい。時間は決してとどまらず、戻ることもないという不可逆性を認識しつつ、自然の再生（リターン）にも似た、もう一つ外側の円環的な時間の装置を考えていたようだ。インドや中国から伝来した仏教説話や民間伝承に多く見られるところである。この考え方は、時間の不可逆性によって生ずる絶望を希望へと転換させる装置である。中世・近世といわず、科学的思考に覆い尽くされた現在に至るまで宗教が人を救うるのは、このような円環的時間論があるからである。人は異界を信じ、そことの往還、さらに再生・循環を願った。



### 3節 “時間”というテーマ——離別と再会——

——月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やゝ年も暮、春立る霞の空に、白川の関こえんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取もの手につかず、もゝ引の破れをつづり、笠の緒付かえて、三里に灸すゆるより、松島の月先心にかゝりて、住る方は人に譲り、杉風が別荘に移るに、

草の戸も住替る代ぞひなの家

面八句を庵の柱に懸置。——

いうまでもなく『おくのほそ道』のいわゆる<序章>とするこの部分が、「時間」をテーマにしていることは疑いない。もちろん全章が奥の細道を尋ねた旅の記であるから、旅人の「時間」がテーマとされているということである。それは自明のことであるかも知れないが、ここで問題としたいのは、芭蕉がいつ、明確に“時間”をテーマとして意識したか、である。また、何を契機に“時間”を導き出したか、などの点である。

結論からいえば、やはり『古文真宝後集諺解大成』（林羅山諺解・鶴石齋大成、寛文3年刊）との出会いではなかったかと考える。すでに「行春や鳥啼魚の目は泪」の旅立の折の句は、『諺解大成』の「春夜宴桃李園序」の注に「鳥啼キ魚游クノ類。何レモ春ノ風景也」とあるに依ることが小二田誠二氏によって指摘されている。<sup>注⑦</sup>この李白の「春夜宴桃李園序」はよく知られた文章だが、まず次に掲げておく（引用に際し送り仮名は省略した。また割注は〔 〕でくった）。

夫天地者萬物之逆旅〔天地如客舎〕、光陰者百代之過客〔日月如流行過客也〕、而浮世若夢為歡幾何、古人秉燭夜遊〔古詩、晝短苦夜長、何不秉燭遊〕良有以也、況陽春召我以煙景、大塊假我以文章〔莊、大塊假我以形、大

塊即天地也〕、会桃李之芳園、序天倫之樂事、群季俊秀皆為惠連〔謝靈運之弟曰惠連〕、吾人詠歌獨慚康樂〔靈雲襲封康樂侯〕、幽賞未已高談轉清、開瓊筵以坐花、飛羽觴而醉月、不有佳作何伸雅懷、如詩不成罰依金谷酒數〔三斗為罰、出世説、乃竟陵王子良作、石崇有記、一丁十四人、犯者六人、斗者飲酒之杯也〕

『諺解大成』の注解に従って解釈すれば次のようになろう。

「天地——」は「客舎モ旅宿也。云心ハ天地ハ一年二年ニ万物ヲ送り迎ヘテ入宿スル程ニ、天地ハ万物ノ為ニハ旅宿也」。「光陰ハ日月ノヒカリカゲ也」「百代ハ、天地開闢シテ、日月星辰出現スルヨリ、永却千万世迄ヲ指云」「過客ハ、旅人也」と注し、また注の箇所は「日月——」「云心ハ、日月流行シテ千万歳ノ間、四季昼夜チャット替りり過ルハ、旅人ノ客舎ニ移り易ル様子也トゾ」という。

次に「浮世——」の句は「人間ノ生涯ヲ観ズレバ、夢幻ノ如ク甚タ短シ。其内ニ喜ハシキ事幾クカ有ゾ。愁ヘ勝チナル者也トゾ」の意。「古人——」とは、魏武帝の例を引きながら「古人昼ハ短フテ遊フ間モ無レバ、夜燭ヲ立テ遊宴スルハ誠ニ此理有ル故也。是迄ハ日月ノ推シ移ルコトノ速ナルヲ云。人間ノ命ハ夢ノ如クナルニ徒ラニ日ヲハ送ルマジキト也」という。

次に「陽春」「烟景」の句は「烟花風景也。天ノ雲烟、草木ノ花葉、日暄タカニ風和ラギ、鳥啼キ魚游クノ類、何レモ春ノ風景也。……李白言心ハ、常ノ時ダニモ夜遊ヲ為ス可キ事ナルニ、況ヤ此春ノ景氣一段面白ク、我ニ来テ遊ベト請待スル様也」という。「会桃李ハ会合宴会也」「芳園ハ花多クシテ香フ苑也」。「序天倫——」は「我兄弟ノ如クナル衆集テ、歡樂ノ事共ヲ舒叙テ遊フ也」の意。

「群季」「吾人」の句は「群季達ハ皆惠連ガ如ニ秀才ナルガ、我ハ独り靈運ガ如ニ名句名文ヲ作り出ス事ノナラヌハ恥シク思フゾト也」という。最後の「幽賞」から以降は、「風景ヲ幽賞シテ未ダ果テズ、高談又清シテ人ノ耳ヲ雪ムル也」。「瓊筵ハ玉ノ席也。……奇麗ナルヲ称美シテ云」。「如詩——」は「若シ詩ヲ作り得ザル人ニハ罰盃ヲ飲スベシ。左アラバ其ノ盃ノ數ハ、昔シ金谷ニテノ例ノ如ク三盃ゾ、ニセント也」という。

省略した部分もあるが、この注解にしたがって通釈すれば次のようになるのか。

天地は毎年毎年万物を送り迎えしている旅宿であり、日月は永劫万世を行く旅人である。しかるに人間の生涯は夢幻のように短く短い。その間に楽しいことはどれほど有るだろうか。古人たちは昼は短く遊ぶ間もなかったから夜燭を灯して遊宴したというが、まことにそれはゆえあることであった。ましてやこの陽春の風景はいちだんと面白い。私のところへ来て共に遊ぼうではないか。天地も私に文章を書けとさそっている。花香る桃李園に会合し、兄弟のように親しいものたちで楽しみをつくそうではないか。

芭蕉がこの文章の二句目「光陰者百代之過客」をとって冒頭に置き「月日は……」と書き出したのは、この李白の精神である生きている間に歓を尽せという積極的な勧めに応じているものと思われる。芭蕉は冒頭の「夫天地者萬物之逆旅」を省いているが、これは羅山も言うように「事事シク書出シテ、終ニハ罰ハ金谷ノ酒ノ数ニト止メタルハ未物足ラズ」といった批判のあることまで目を通していたともいえそうな感じがする。

また「大塊假我以文章」の句も「おくのはそ道」の執筆に際し、強く響いたところではなかったか。「太塊ハ天地ノ異名也。羅山ノ曰、天地モ我ニ文章ヲ書トテ假サレテアル程ニ、能キ幸ソト也。我詩文ヲ作ル智慧ハ天ヨリ備用シタル者也」の解は、旅そのものに対して、芭蕉が「古人も多く旅に死せるあり。予も……」と続けてなずらえるところと同じ発想である。この李白のいう「古人」と「我」の関係を、芭蕉は旅における「古人」と「予」に置いていると思われる。

すでに指摘されているようにこの「春夜序」の文章は近世人に少なからず強い影響を与えている。大淀三千風は『日本行脚文集』（元禄3年刊）に冒頭の二句を引き「予も其独にかずらへて、虚無の外駅に生出し。身をありわぶとしもはあらざれど。只四時の餘波に倡なはれ。東にちり西にあふる」と書いている。三千風の場合もこの文章から旅へと誘引されており、その想いと境遇は似通っている。また、西鶴が『永代蔵』の巻頭の章の序のあたりで用いたのもよく知られるところである。近世人に与えた強い影響力ははかりしれないものが

あったといえよう。

また、「草の戸の」の句についても時間について考えるべき点がある。この句は原形は次のようなものであった。

はるけきたびの空おもひやるにも、いささかもここにさはらんものむつ  
かしければ、日比住ける庵を相しれる人にゆづりていでぬ。この人なむ、  
つまをぐし、むすめ・まごなどもてるひとなりければ、

草の戸も住かはる世や雛の家 (『世中百韻』)

ここでは「住かはる世や」から、『おくのほそ道』では「住替る代ぞ」と推敲されている。これについては、最近発見された元禄2年3月23日付の落梧苑芭蕉書簡においても同じく「住かはる世や」である。この部分「世」から「代」への書き替えは意味がある。どちらも「世代」の意であろうが、「世」はどちらかといえば世間、世俗の空間的意味であり、「代」は移り代る「世代」や「時代」の意味である。つまり芭蕉は、ここを推敲する際時間というものを強く意識したと考えられる。

芭蕉は<武隈>の松が何代も替っていても「千歳のかたちとゝのほひて、めでたき松のけしきなん待し」という。<壺碑>では、歌枕のおぼつかなさど、風景が変化し「時移り、代変じて其跡たしかならぬ事のみを、爰に至りて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す」と記す。これこそが「行脚の一徳、存命の悦び」だと涙を流す。また<塩竈>でも古い宝燈に刻まれた記事に「五百年來の俤、今日の前にうかびて、そぞろに珍し」と記す。

そして<平泉>では、藤原三代の栄耀も一睡の夢と観じ、この城跡の「功名一時の叢」を杜甫の「春望」に思いを重ねて涙を落す。

確かに芭蕉の旅は言われているように多くの欲ばった目的があった。

- |             |               |
|-------------|---------------|
| (1) 歌枕を尋ねる  | (2) 自然に接する    |
| (3) 未知の人に会う | (4) 古人の心を追慕する |
| (5) 漂泊を体験する | (6) 新風を開拓する   |

など、『詳考奥の細道』(阿部喜三男氏)の掲げるところはすべて包含していると思われる。また、これをまとめると白石佛三氏が言われるように「詩が言葉の純粹な在り様なら、『風雅における者』はすべからく旅人であらねばならな

い。かくて『日々旅にして旅を栖とす』という主題が生まれ、『造化にしたがひて四時を友とする』主人公が設定された。そして『風羅坊という』無名の主人公によって、新しい旅の本意をえがいてみせた意図的作品<sup>注④</sup>であった。

「旅を栖とす」という主題には当然時間の意識を含んでいる。ただここで注意しておくべきは、出発前の旅の目的と、旅を終えたあとの差を考慮すべきという点である。離別と再会の経験で得られたのは時間の価値であろう。

素龍清書本は元禄7年初夏に完成した。芭蕉は元禄2年9月以来『ほそ道』執筆を考えてきた。とりわけ元禄3、4年の去来・凡兆らとの『猿蓑文集』の計画にあわせていたらしい<sup>注⑤</sup>。それ迄書き捨てた草稿がいくつも残っている。しかし、それをつないだとしても『おくのほそ道』は今の形にはならない。おそらく、この<序章>をとり除いてしまった『おくのほそ道』は果してこれほど読まれたであろうか。芭蕉は、『古文真宝』の李白の「春夜序」に出会ってはじめ「時間」をわが旅の生活の上に托して、その人生を観想する眼を得たと考えるのである。残された草稿と完成した『おくのほそ道』との比較を通してみると、“時間”の意味をこめた加筆のあとをみるのできるのである。近世の“時間”意識の上に与えた「春夜序」の影響の大きさについては、あらためて検討してみる必要があるだろう。本稿ではひとまず『古文真宝諺解大成』と『おくのほそ道』のテーマをめぐって“時間”論の立場から展望してみたものである。

#### 注

- ① 『漢籍国字解全書』第11巻による。以下の引用も同じ。引用に際しては若干の送り仮名を補ったところがある。
- ② 『吉川幸次郎全集』第6巻。
- ③ 『詩人たちの時空—漢賦から唐詩へ—』(平凡社、昭和63年刊)。
- ④ 『本朝文鑑』は享保3年(1718)刊。支考編。引用は古典俳文学大系「蕉門俳論俳文集」による。
- ⑤ 戸倉英美氏前掲書『詩人たちの時空—漢賦から唐詩へ—』68P。
- ⑥ 西尾夷氏『方丈記・徒然草』(古典文学大系)解説には「この詠嘆的無常観から自覚的無常観への深まりは、まさに鎌倉時代初期における方丈記から、鎌倉時代最後のつれづれ草に至る百何十年かの歴史が辿った文化の歩みである」と論じている(68P)。

## 8章 文学に見る時間意識

- ⑦ 「鳥啼魚の目は涙」典拠小考（『俳文芸』32号（昭和63年12月）。
- ⑧ 昭和34年，山田書院刊。
- ⑨ 「もう一つの『細道』」（『文学』昭和50年12月，いま日本文学叢書『芭蕉』Ⅱ〔有精堂〕によった。）
- ⑩ 桜井武次郎氏「『おくのほそ道』成立に関する一討論」（『連歌俳諧研究』41号，昭和46年9月）。